

第3章 1区の調査成果

平面は不整楕円形を呈し、長軸 1.18 m、短軸 0.94 m を測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは最大 0.14 m である。底面は、不整楕円形を呈し、長軸 1.0 m、短軸 0.75 m を測り、ほぼ平坦である。1 - IX 層まで掘り込まれる。

埋土は、シルト質の黒褐色土が単層で入る。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。性格は不明である。

SK12 (第35図、PL. 24)

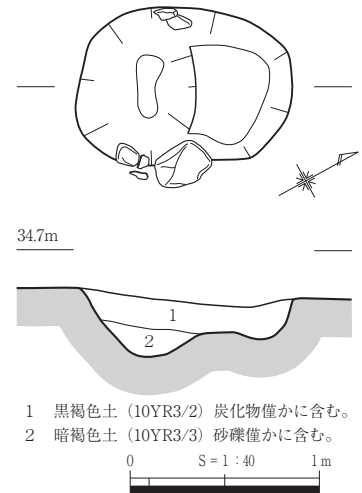
1区中央北側のB6グリッドにあり、標高 34.4 ~ 34.5 m 付近の傾斜変換点付近に立地する。1 - V 層除去後の 1 - VI 層上面で検出した。東側約 1 m には SK13 が、西側約 2 m には SK 7 がある。

平面は不整隅丸長方形を呈し、長軸 1.12 m、短軸 0.85 m を測る。断面は皿状を呈し、底面は凹凸が認められる。深さは 0.14 ~ 0.4 m を測る。底面は、不整隅丸長方形を呈し、長軸 0.5 m、短軸 0.38 m を測り、南側が深く窪む。1 - VI 層まで掘り込まれる。

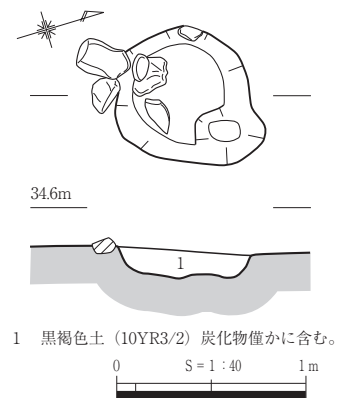
埋土は、2層に分層できた。1層にはわずかに炭化物を含む。1層下面はほぼ平坦であることから、2層で窪みを埋めた後、人為的に埋め戻した可能性がある。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物から、縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。人為的に埋められた可能性があることから、土壌墓であった可能性がある。



第35図 SK12



第36図 SK13

SK13 (第36図、PL. 24)

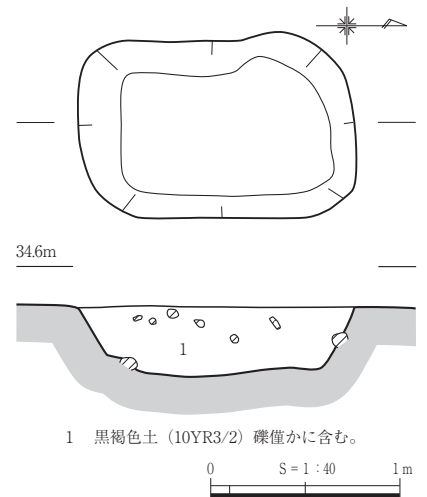
1区中央北側のB5グリッドにあり、標高 34.3 ~ 34.4 m 付近の緩斜面に立地する。1 - V 層除去後の 1 - VI 層上面で検出した。西側約 1 m には SK12 がある。

平面は不整楕円形を呈し、長軸 0.84 m、短軸 0.7 m を測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは最大 0.17 m を測る。底面は、不整円形を呈し、長軸 0.5 m、短軸 0.46 m を測り、ほぼ平坦であるが、北側はピットが掘り込まれる。1 - VI 層まで掘り込まれる。

埋土は、炭化物をわずかに含む黒褐色土が単層で入る。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物及び検出層位から、縄文時代後期から晩期ごろと考えられる。形状及び埋土が類似する



第37図 SK16

SK12と類似することから、土壙墓であった可能性がある。

SK16 (第37図、PL.24)

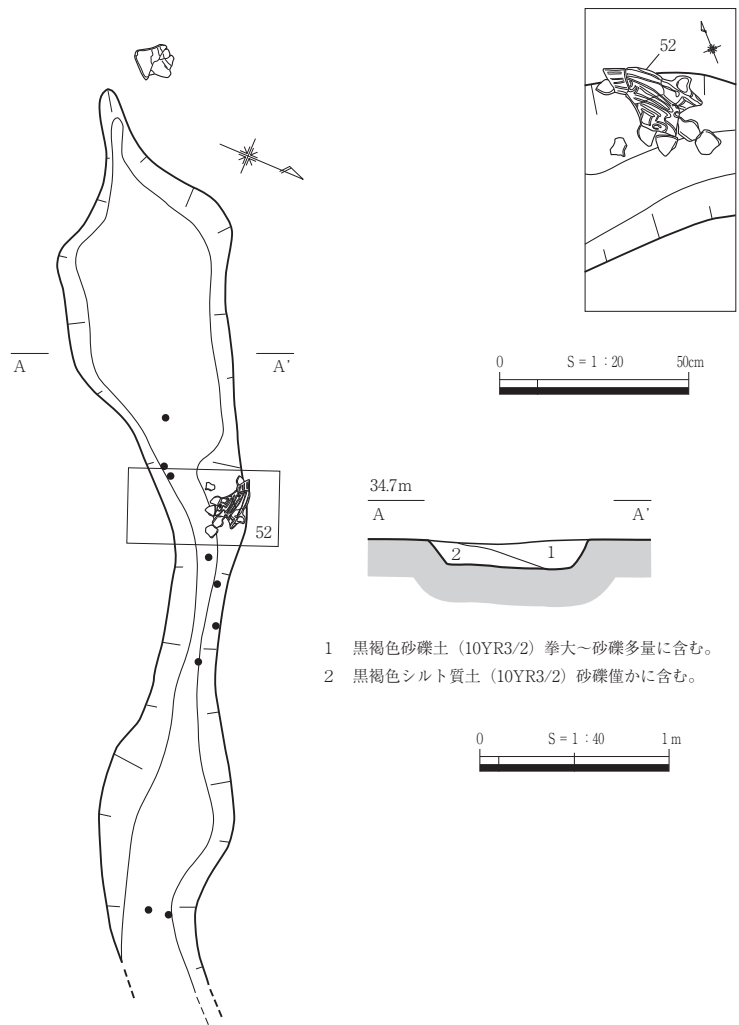
1区北東側のD3グリッドにあり、標高34.3m付近の平坦面に立地する。1-V層除去後のVI層上面で検出した。東側約1mにはSK6がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.47m、短軸0.94mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.34mである。底面は、不整隅丸長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.64mを測り、ほぼ平坦である。1-IX層まで掘り込まれる。

埋土は、礫を含む黒褐色土が単層で入る。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物から、縄文時代後晩期ごろのものと考えられる。性格は不明である。



第38図 SK16

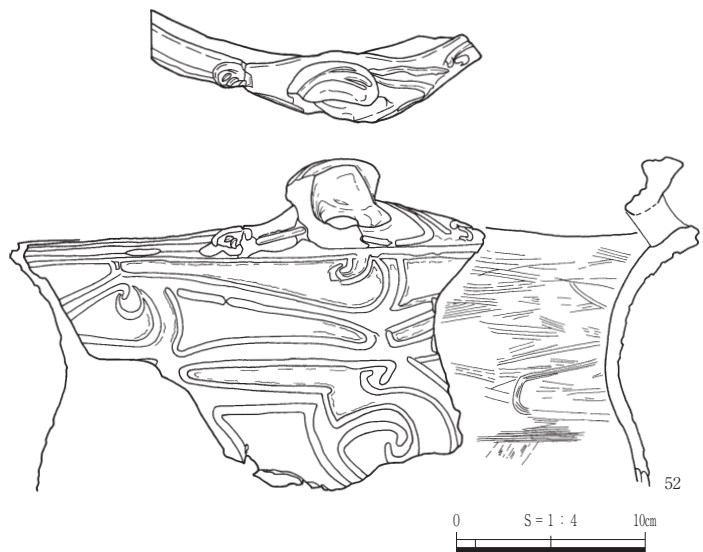
4 溝

SD3 (第38・39図、PL.25・39)

1区北東側のC5グリッドにあり、標高34.5m付近の平坦面に立地する。造成土を除去した後の1-V層上面で検出した。北側約4mには、SK13がある。

南西から北東方向へ延びる溝で、やや湾曲するがおよそN-65°-Eの方向へ延びる。検出した範囲では、長さ5.0m、幅0.28~0.84mを測る。断面は概ね逆台形状を呈し、深さ8~16cmを測る。底面は凹凸があり、底面の標高は34.38m程度でほぼ平坦である。

埋土は、上層が砂礫を多量に含む黒褐色砂礫土、下層は砂礫をわずかに含む黒褐色シルトである。



第39図 SD3 出土遺物

第3章 1区の調査成果

埋土上層で、縄文土器有文精製深鉢52が出土した。

出土遺物から、島式併行（中津・福田KⅡ式土器様式第3様式新段階）、縄文時代後期初頭ごろのものと考えられる。

明瞭な掘り込みではないが、等高線に沿わずに掘り込まれていることから、人工的な溝と考えられ、砂礫を含むことから、ある程度の流水があったものと思われる。

SD4（第40図、PL.25）

1区東側のE4グリッドの北西で検出した溝状遺構である。SI3の北縁に重なるように検出された。

平面形は逆L字状を呈し、東南東から西北西へ3.5mのところまで北北東へ屈曲し、さらに2.6m伸びている。溝の幅は0.25～0.5m、深さは5～10cmである。底面の標高は、南東側が34.73m、北西側が34.68mとなり、緩やかに傾斜している。

埋土は砂質で、砂礫が多量に含まれており、ある程度の水量があったものと考えられる。

埋土中から、縄文土器片が出土しているが、図化できなかった。

溝が形成された時期は、縄文時代後期初頭のSI3が廃棄され、埋没した後であることから、縄文時代後期初頭ごろと推定される。

性格は不明ではあるが、人工的に掘られた溝と考える。

5 集石・石柱

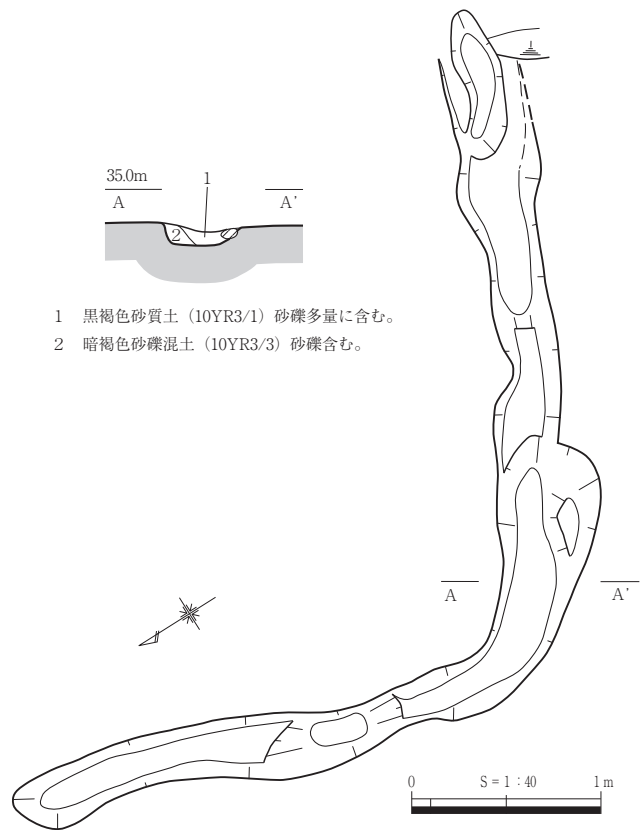
集石1（第41～43図、PL.26・27・37）

1区東側のE4グリッドの西側にあり、SI3の範囲内の北側に形成されている。

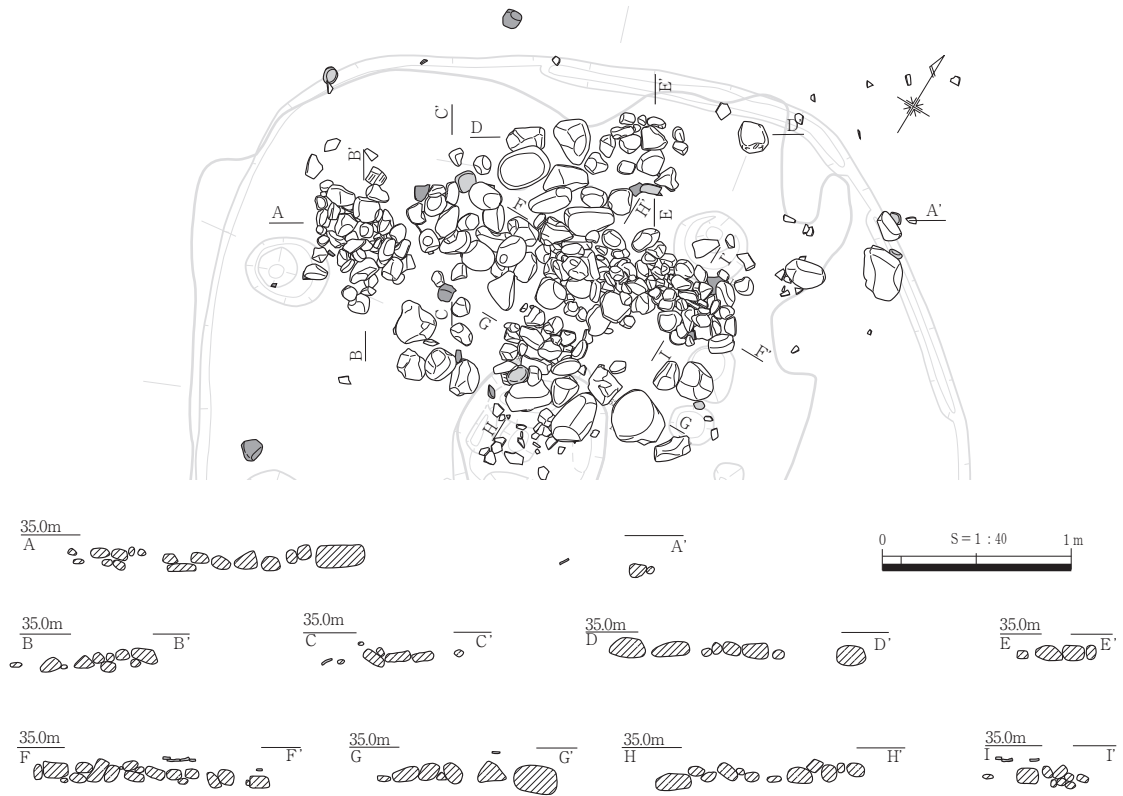
礫は2.4m×1.9mの範囲に集中し、1～3段に積まれている。礫は5～30cm大の安山岩の円礫または亜円礫であり、遺跡周辺から持ち込まれたものと考えられる。

集石の形成は無作為に投棄されたものではなく、集合する礫の大きさにまとまりがあることや、礫と礫がしっかりと噛み合い、ぐらつきがないことなどから、人為的になされたものと推定される。この集石は、礫の大きさと集合の粗密から、直径50～60cmの円形にまとまる、9ないしは10個の支群に分かれるように観察されるが、形成の順序を把握することはできなかった。集石に伴う掘り込みは検出されなかった。

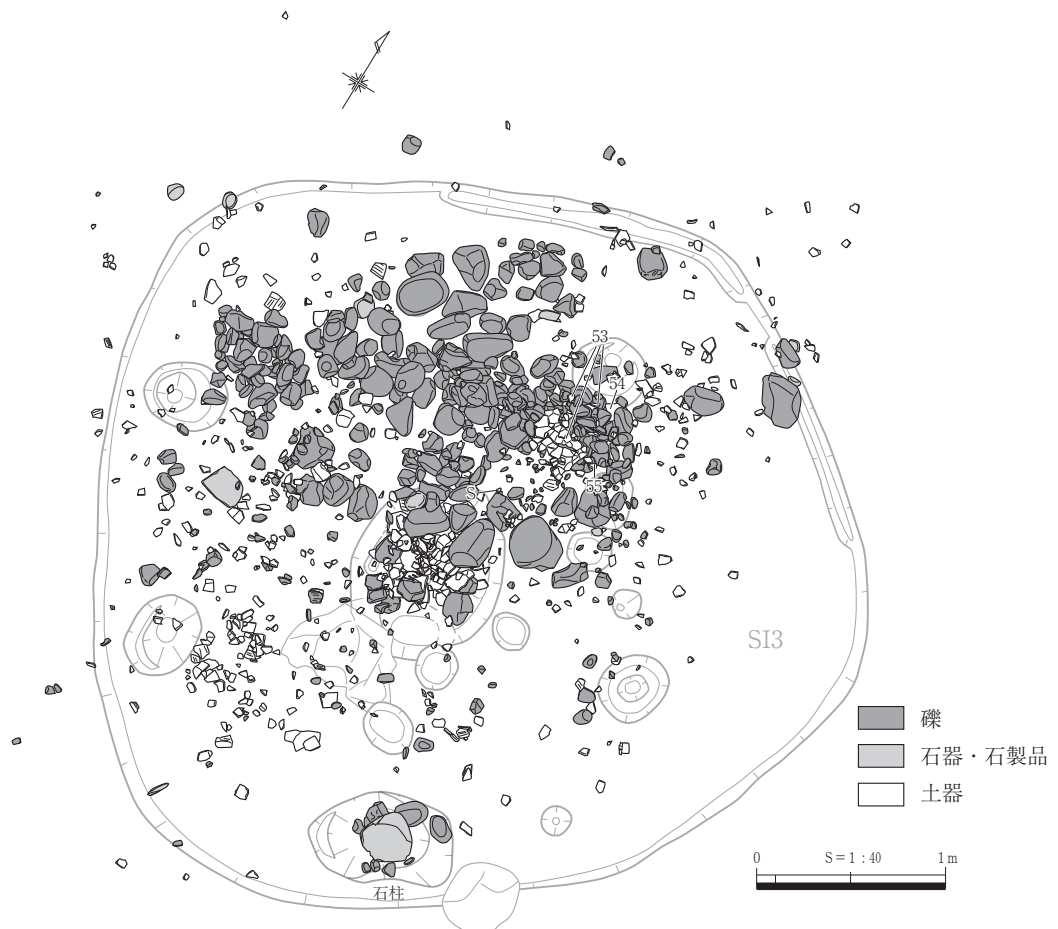
集石の周辺および礫の隙間には多量の土器片が散在し、中には礫の隙間に意図的に食い込ませたものもあった。集石の上面から、装飾された口縁部をもつ粗製深鉢53が出土したが、これは集石の上



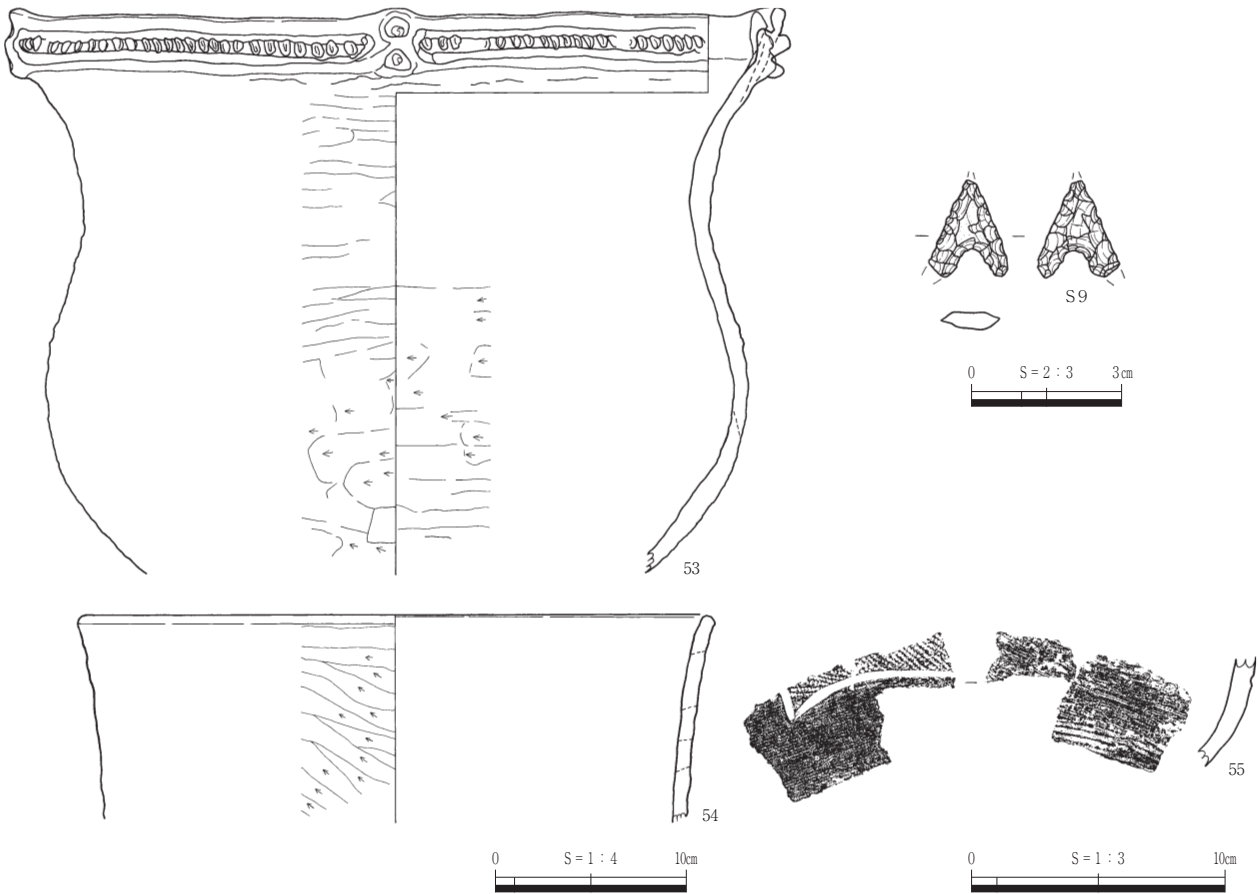
第40図 SD4



第41図 集石1



第42図 集石1 遺物出土状況



第43図 集石1出土遺物

面から1～2cmほど上で出土した。

この集石は、SI 3の埋土中に形成されており、礫の底面の高さは、SI 3の床面から5～10cm上の位置にある。掘り込みは検出できなかった。

図化した出土遺物には、先述の有文粗製深鉢53、無文粗製深鉢54、有文精製深鉢55がある。55は、SI 3に伴う古い時期の遺物が混入したものと考えられる。その他、サヌカイト製凹基無茎石鏃S9がある。

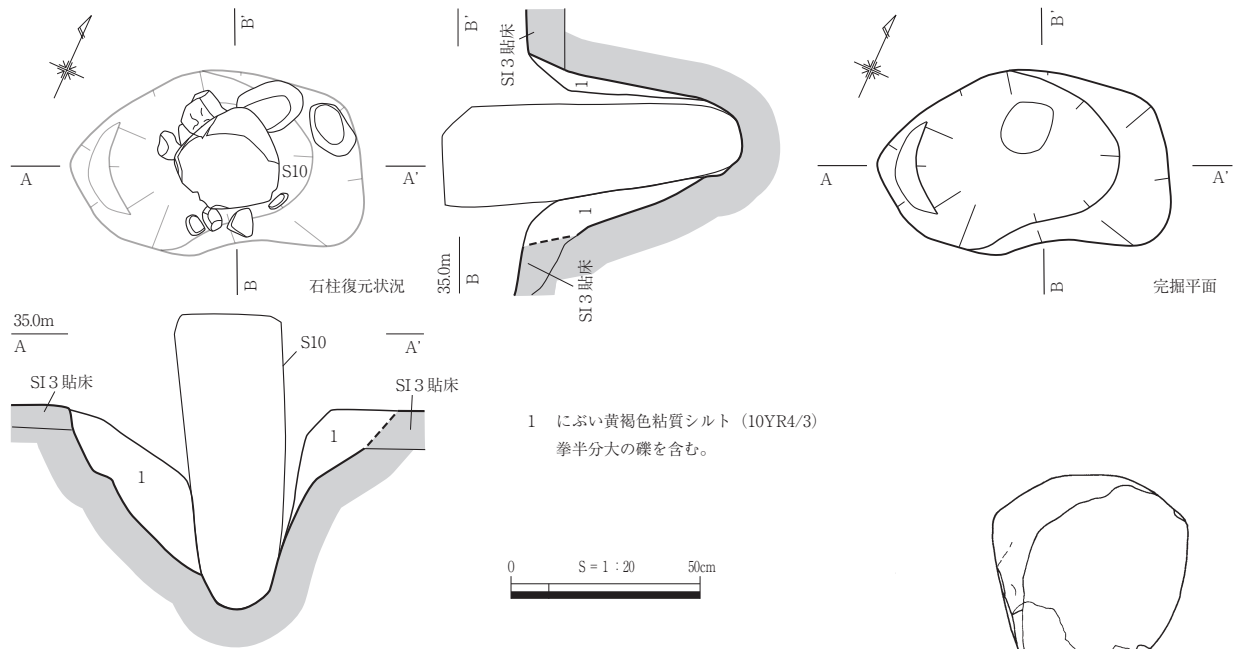
遺構の時期は、出土した土器の年代から、崎ヶ鼻1式（縁帯文土器様式第1様式）併行、縄文時代後期前葉ごろと考えられる。

遺構の性格は明らかではないが、何らかの祭祀が行われた場所であることが想定される。

石柱（第44・45図、PL. 26・27・58）

1区東側のE4グリッドの南西隅にあり、SI 3の南端で検出した。重機による表土掘削中に、直径約30cm、長さ73cmの円柱状の石材（石柱）が横倒しになって出土しており、その付近の地面に、その石柱がぴったりと収まる大きさのピット（石柱ピット）が空いていたことから、元は地面に埋まっていた石柱が、圃場整備時に抜かれたものと判断した。

この石柱は細長い砲弾型を呈し、先端は丸みを帯び、反対側は平面をもつ。穴の底面が丸みを帯びて固くしまっていたことから、石柱は尖った方を下に、平坦な側を上にして立てられていたと推定される。石柱はSI3の床面から掘り込まれた石柱ピット内に立てられていたものと考えられ、上部約



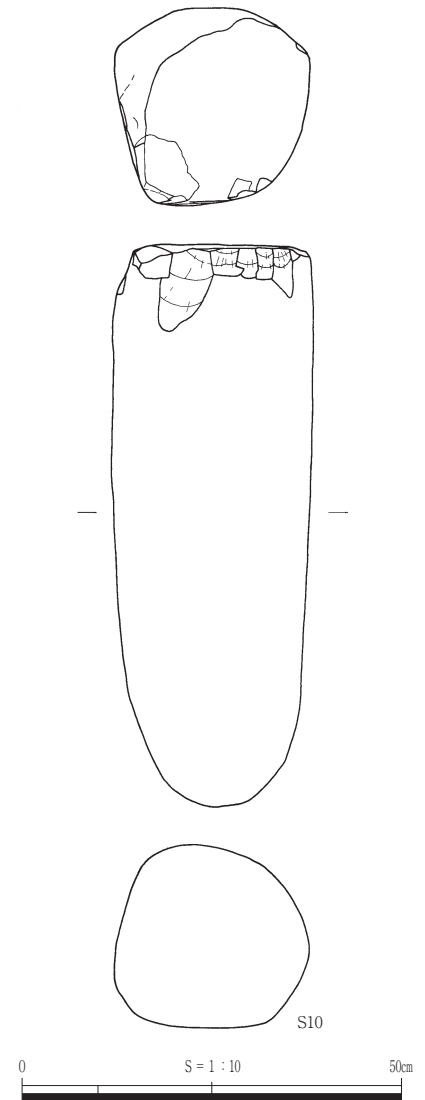
第44図 石柱

20cm が露出していた。露出した石柱の根元周りは、直径5～20cm 大の円礫で固定されていたと推定される。

石柱ピットの掘方平面は、長軸0.75m、短軸0.5mの楕円形で、深さ0.55mを測る。長軸の向きの南西側のピット壁面が斜面を呈することから、石柱を立てる際に南西側からすべり落とし、垂直に立て直したものと推定される。

埋土は、地山(1-VI層)と同質で、固く締まっていた。石柱ピットは位置関係からSI3の支柱穴と重複したものと判断され、SI3の廃棄後に石柱を立てるために新たにピットを掘りこんだものと推定される。

石柱は緻密な安山岩製で、表面全体が研磨されている。一方の端が平らな面をもっているが、この面も滑らかに研磨されていることから、後世の耕作等によって折損したものではなく、縄文時代に加工されたものと推測される。石棒の可能性も考えられるが、その大半が地中に埋まっていることや、露出した側が平らになっていることから、台のような使われ方をした可能性も考えられる。いずれにしても近接する集石1との関連が強く、祭祀的な性格の遺構と考えられる。



第45図 石柱実測図

6 土器溜り

土器溜り1 (第46～51図、表6、PL. 27・39～45・59)

調査区北東側調査区際のB5グリッドにあり、標高34.1～34.5mの浅い谷部に向かう緩やかな斜面部に形成されている。1-V層中にあり、SK12・13の上層で検出された。大量の縄文土器片の中に、わずかに石器が含まれている。

図化した遺物は、五明田式併行(中津・福田KⅡ式土器様式第3様式古段階)から布勢式(中津・



- 1 表土
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性なし、しまり強。(旧表土)
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) と褐灰色土 (10YR4/1) が混ざる。
1mm以下の粗砂を多く含む。粘性なく固くしまる。(造成土)
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粗砂をやや多く含む。シルト質。
- 5 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや強く、固くしまる。シルト質。
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。砂粒を少量含む。粘質。
- 7 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。部分的に鉄分が沈着する。やや砂質。
- 8 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、軟。均質。ピット埋土か。
- 9 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、軟。炭化物を少量含む。やや砂質。
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。5～30cm大の礫を非常に多く含む。遺物なし。
- 11 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。均質。
- 12 黒褐色土 (10YR2/3) 径1cm以下の小礫を少量含む。粘性なく、軟。遺物を非常に多く含む。
- 13 におい黄褐色土 (10YR5/4) 径1cmの砂礫と炭化物を少量含む。
粘性強く、軟。

第46図 土器溜り 1

福田 K II 式土器様式第 4 様式) にかけてのものが主なものである。このうち、粗製土器を除くと、出土量が多いのは布勢式併行期 (中津・福田 K II 式土器様式第 4 様式) のものである。

五明田式併行のものは、有文精製深鉢 56、有文精製浅鉢 57～60 である。変曲点でくいちがいが見られる 2 条沈線による磨消縄文が施されるものである。

島式併行のものは、有文精製浅鉢 61～63、有文精製深鉢 64～68 である。2 条沈線のみで縄文が施されないもの (64・65・67・68) と、3 条沈線による磨消縄文が施されるもの (66) がある。

布勢式併行のものには、有文精製深鉢 69～80 がある。縄文が施されないもの (69・70・76・78) と、縄文が施されるもの (71～75・77・79・80) がある。橋状把手をもつ 72～74 は、接合しなかったものの同一個体の可能性がある。79 の体部には、条痕地に 2～3 本沈線による施文が施される。また、柱状突起をもつ 80 は、大型の深鉢で加飾性に富む。

波状口縁をもつ無文精製土器 81・82、橋状把手をもつ無文精製深鉢 83、無文精製浅鉢 84～89、底部 90～96、外面粗いナデが施される粗製深鉢 97～112、内外面条痕が施される深鉢 113 は、縄文時代後期初頭に帰属するものと考えられる。

無文精製浅鉢 96 は、内外面丁寧なミガキが施されるもので、布勢式 (中津・福田 K II 式土器様式第 4 様式) に併行するものと考えられる。

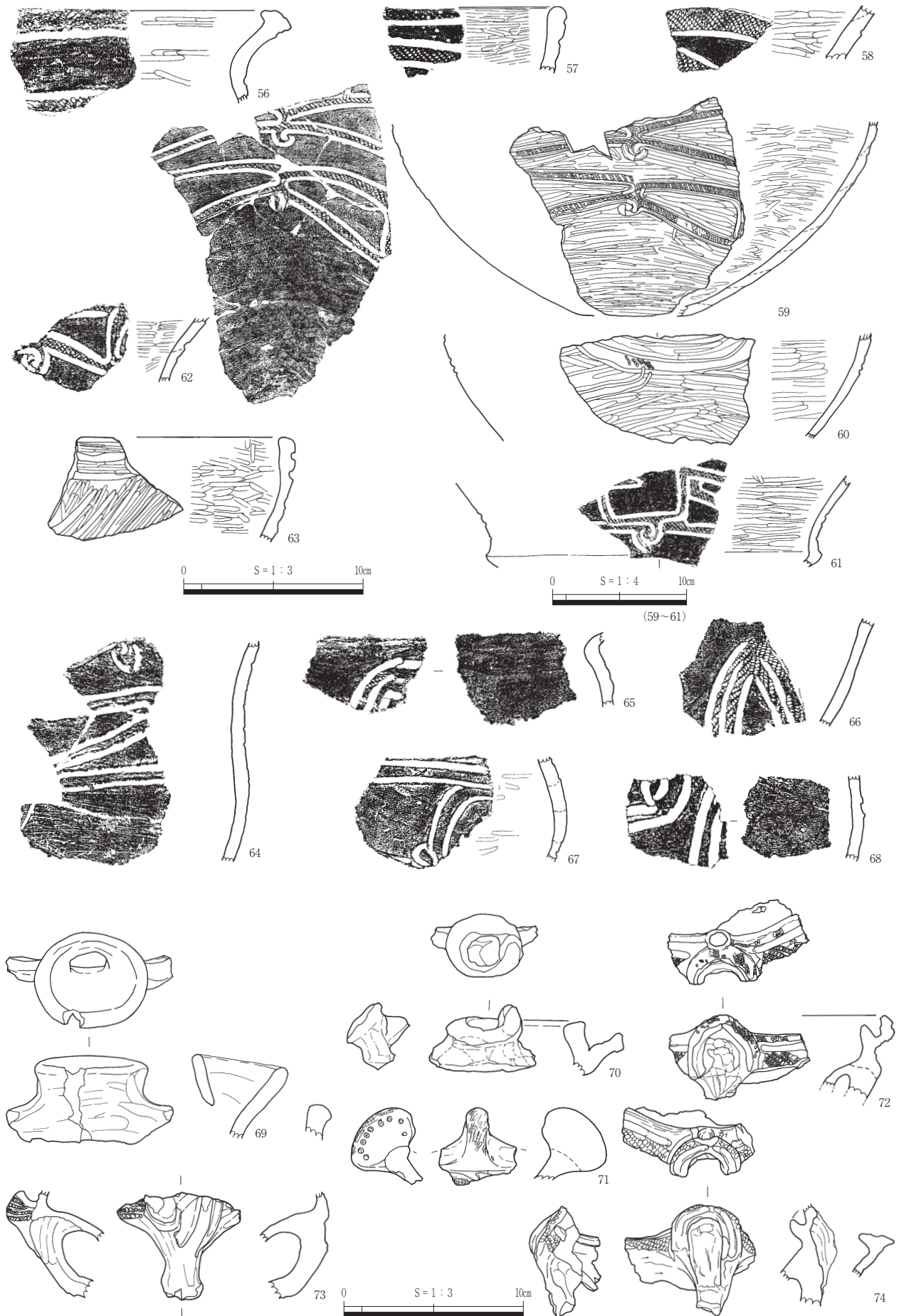
その他、石器がわずかに出土しており、黒曜石製凹基無茎石鏃 S 11、黒曜石製石錐 S 12、サヌカイト製楔形石器 S 13、サヌカイト製削器 S 14 を図化した。S 11 は小型の石鏃で、ほぼ完形である。S 12 は、先端が磨耗している。S 14 は、両側縁に刃部をもつものである。

この土器溜りは、縄文時代後期の集落が形成され始めた時期から衰退するまでの遺物が出土しているが、割合的に多いのが、帰属時期が明確ではない粗製土器を除くと、所謂布勢式併行期であることから、この時期に形成されたものと考えることが可能であろう。また、調査区南際で検出された堅穴建物 SI 1 と同時期と考えられ、調査区の北側にもこの時期の集落が営まれていた可能性がある。

なお、布勢式に併行すると考えられる、有文精製深鉢 74 の内面に付着した炭化物 (所謂おこげ) の放射性炭素年代測定を行ったところ、試料番号 1456 (測定番号 IAAA-112333) は、補正測定値 $4,010 \pm 20\text{yrBP}$ という値で、Intcal09 による暦年較正年代値では 2,567～2,486calBC の範囲、縄文時代中期末葉から後期初頭ごろとされた。また、Marine09 による暦年較正年代値では 2,116～2,021calBC の範囲にあり、後期前葉ごろに相当するとされた (第 5 章参照)。土器型式からすると、74 は布勢式に併行する土器と考えられ、Intcal09 で較正した年代値は若干古めであり、Marine09 で較正した年

表 6 土器溜り 1 出土土器時期別割合

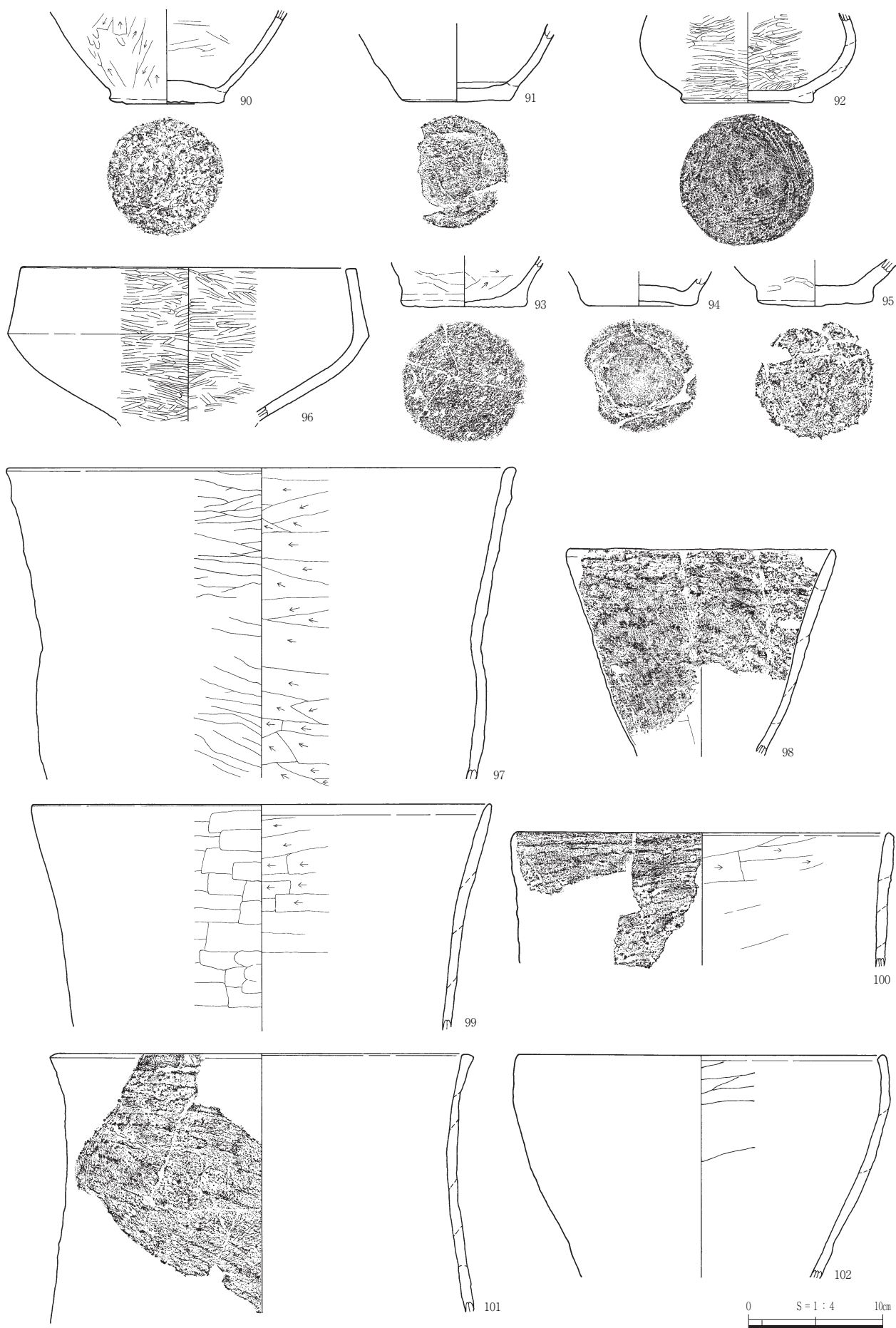
| 時期 | 点数 | 割合 |
|-----------------|-------|---------|
| 早期末 (菱根式) | 1 | 0.05% |
| 中期後葉 (里木 II 式か) | 1 | 0.05% |
| 中期末葉 (北白川 C 式) | 1 | 0.05% |
| 後期初頭 (五明田式) | 20 | 1.00% |
| 後期初頭 (島式) | 54 | 2.71% |
| 後期前葉 (布勢式) | 65 | 3.26% |
| その他・不明 | 656 | 32.90% |
| 粗製土器 | 1,196 | 59.98% |
| 総数 | 1,994 | 100.00% |



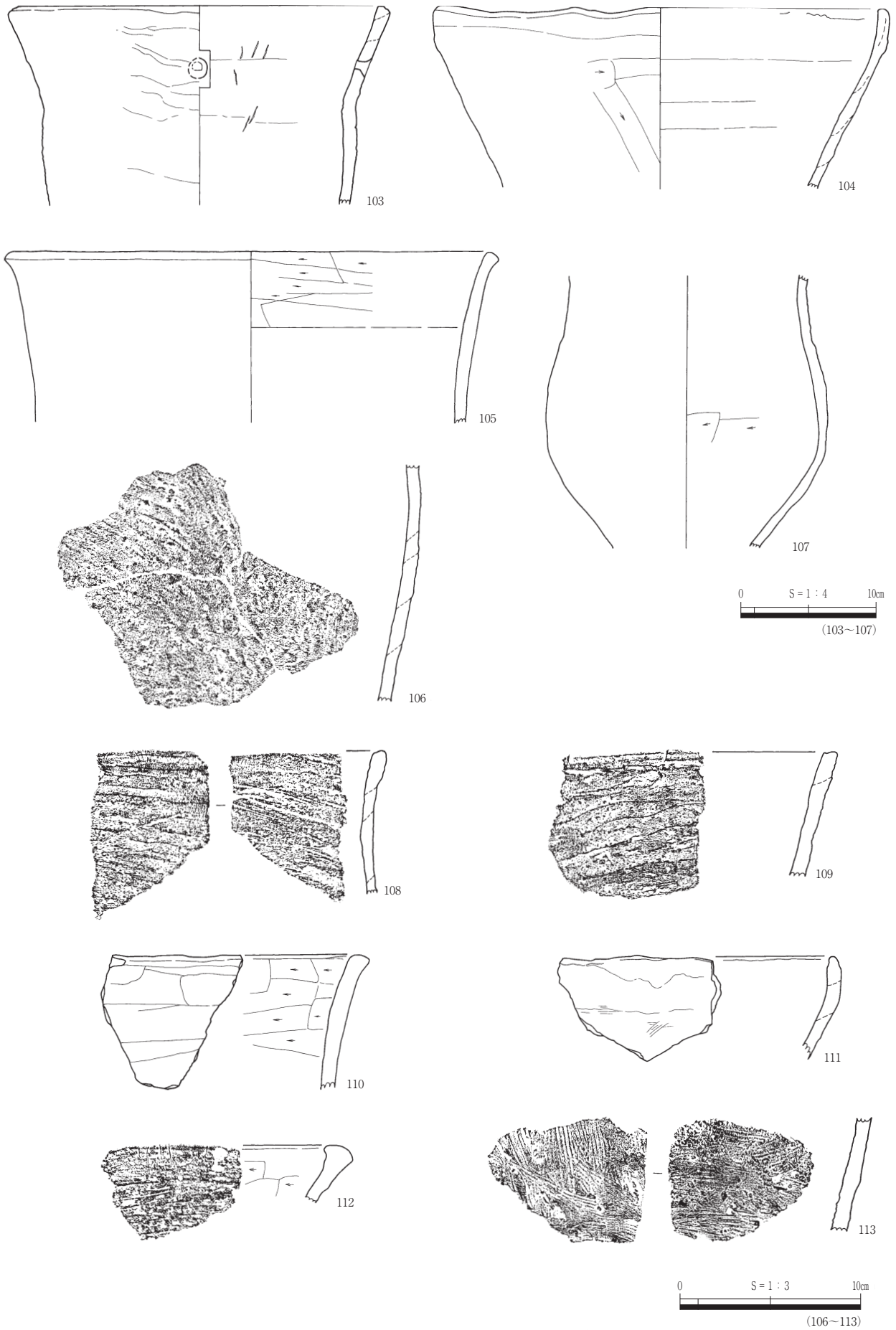
第47図 土器溜り1出土遺物(1)



第48図 土器溜り1出土遺物(2)



第49図 土器溜り1出土遺物(3)



第50図 土器溜り1出土遺物(4)

代値については、試料の由来が明らかではないものの、土器型式に近い数値であると考えられ、付着した炭化物は海洋性のものを含んでいる可能性がある。

7 縄文時代包含層遺物

1-V層出土遺物（第52～56図、表7、PL. 46～48）

調査区全域からは、大量の縄文土器が出土しているが、比較的まとまった縄文時代に限られる遺物包含層として認識できたものは、V層のみであった（第3章第1節参照）。それ以上の遺物包含層（1-II～1-1-IV層）については、他時期の遺物を包含しており明確に時期を特定することはできなかったため、各層位毎で後述することとする。

1-V層は、概ね調査区東側にのみ遺存していた。黒色から黒褐色土が主体となる遺物包含層である。調査時は、1-IV層との明確な差を認識できなかったこともあり、一部1-IV・V層一括（黒褐色土）として取り上げてしまったものもあるが、抽出できたものに限って、1-V層として図化したものを分けて報告する。なお、前述のとお

りB5グリッドの1-V層中において、集中して出土した遺物群については、土器溜り1として分別した。

1-V層出土遺物のうち図化したものを時期別にみることにする。

早期のものとしては、ネガティブ押型文をもつ深鉢114、山形押型文をもつ深鉢115～117、ポジティブ楕円押型文をもつ118～125がある。114は大川・神宮寺式に帰属するものと考えられる。115～124は黄島式併行期、125は粗大な押型文となることから、高山寺式に帰属するものと考えられる。

早期末から前期初頭のものとして縄文地の繊維土器126～131がある。菱根式に帰属するものと考えられる。

中期末葉のものとして、北白川C式併行と考えられる132がある。

後期初頭の五明田式併行期（中津・福田K II式土器様式第3様式古段階）のものとしては、有文精製深鉢133～144、有文精製浅鉢145～147がある。変曲点にくいちがいがあ

る2本沈線による磨消縄文が施されるものである。島式併行期（中津・福田K II式土器様式第3様式新段階）のものとしては、有文精製深鉢148・152～157、精製双耳壺149・150、精製鉢151がある。有文精製深鉢には、3本沈線による磨消縄文が施される148と、磨消縄文が入らない2本沈線による施文が施される152～157がある。

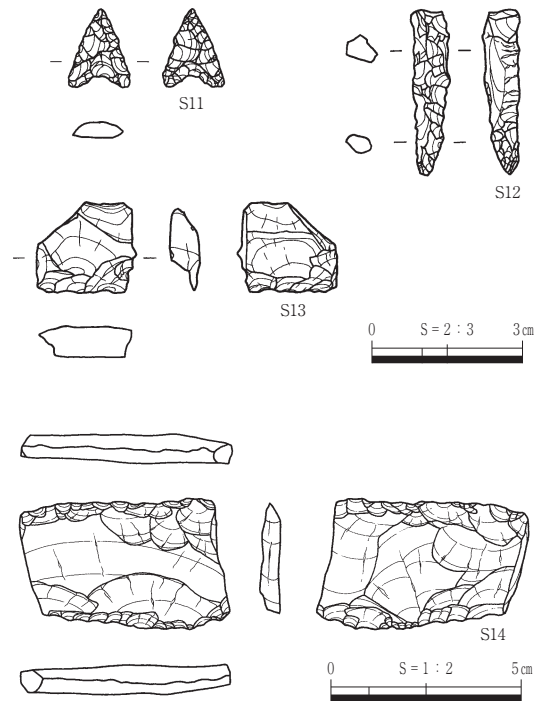
また、布勢式併行期（中津・福田K II式土器様式第4様式）のものとしては、有文精製深鉢158～163がある。158は、3本沈線による磨消縄文が施されるもので、口縁端部にも文様帯があるが胴部の文様帯と完全には分離していない。

波状口縁をもつ無文粗製深鉢164は、後期初頭に帰属するものと考えられる。

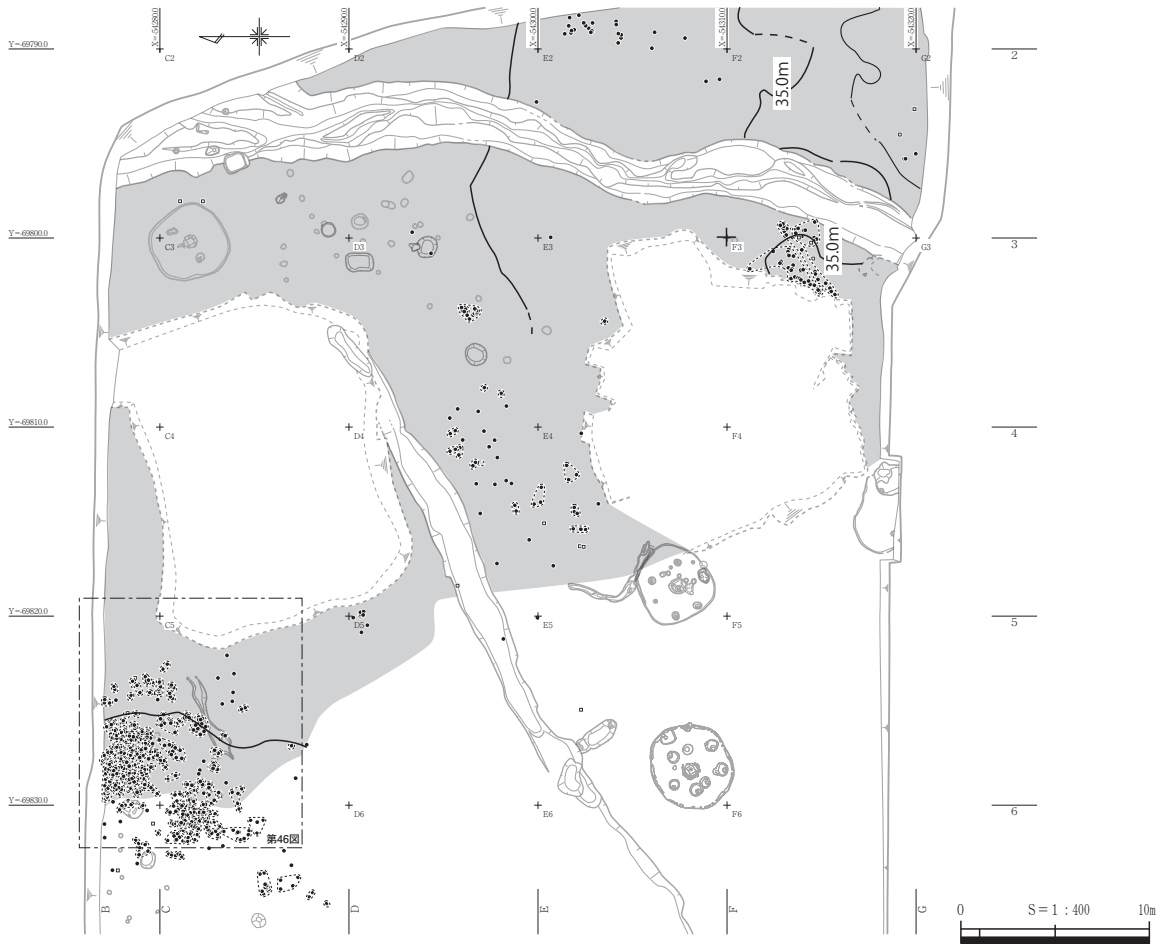
後期前葉の縁帯文土器様式第1様式のものとして、深鉢165がある。体部は粗いナデが施される。

晩期初頭の西日本磨研土器様式第1様式のものとして、精製壺166、精製浅鉢167～169がある。

晩期後半の突帯文系土器様式のものとして、精製浅鉢170～173、口縁部に突帯文が施される鉢



第51図 土器溜り1出土遺物（5）



第52図 1-Ⅳ・Ⅴ層範囲と遺物出土状況

177、底部 178、深鉢 179～185、体部に隆帯をもつ 186、粗製深鉢 187・188 がある。

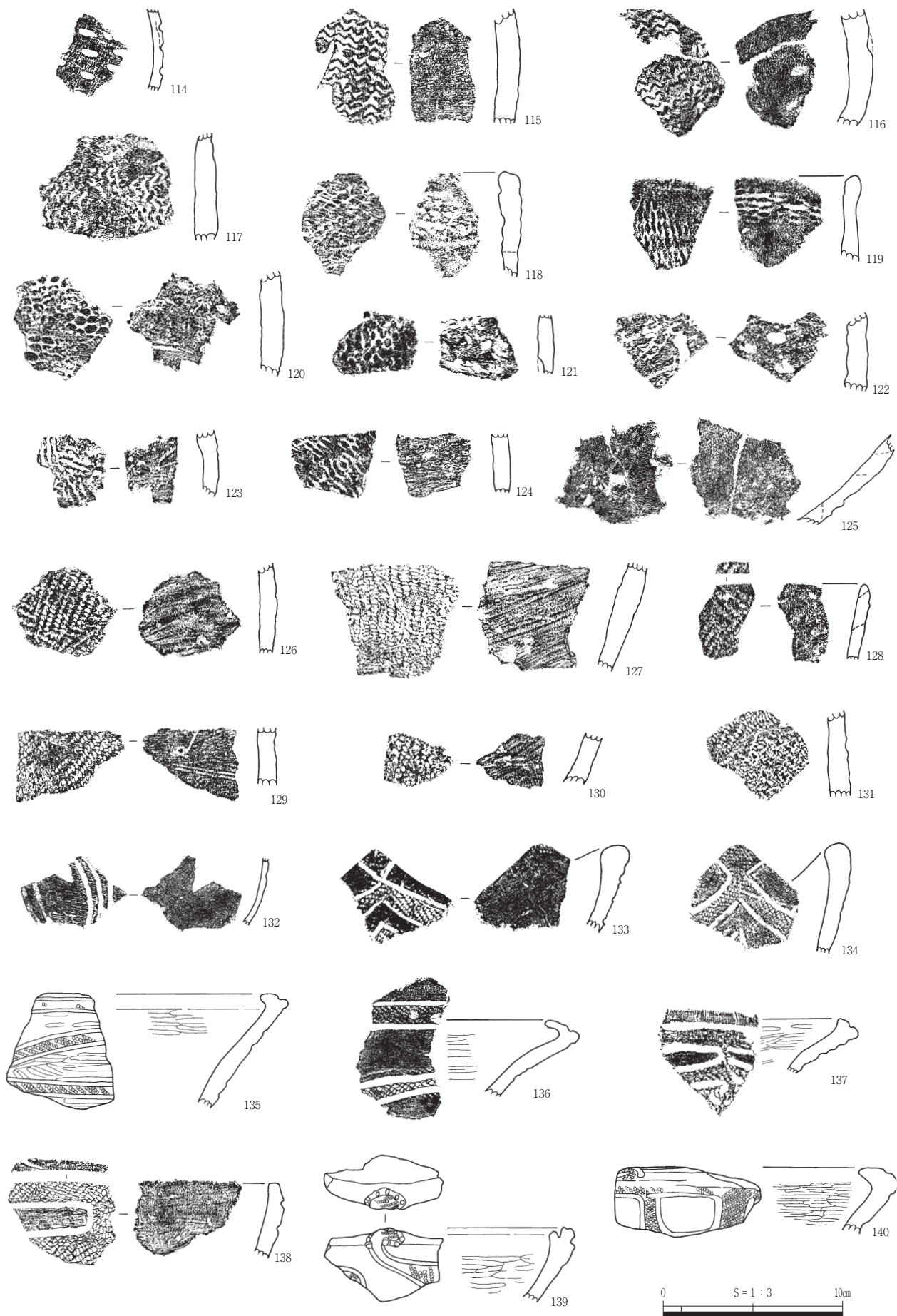
底部 174～176 は、詳細な帰属時期は不明である。

また、石器も出土しており、匳化したものはサヌカイト製石鏃 S 15～S 18、黒曜石製石鏃未成品 S 19、黒曜石製石鏃 S 20、サヌカイト製石鏃未成品 S 21～S 23、黒曜石製楔形石器 S 24、サヌカイト製削器 S 25・26、閃緑岩製磨製石斧 S 27、安山岩製磨石 S 28、角閃片麻岩製と考えられる切れ目石錘 S 29 がある。

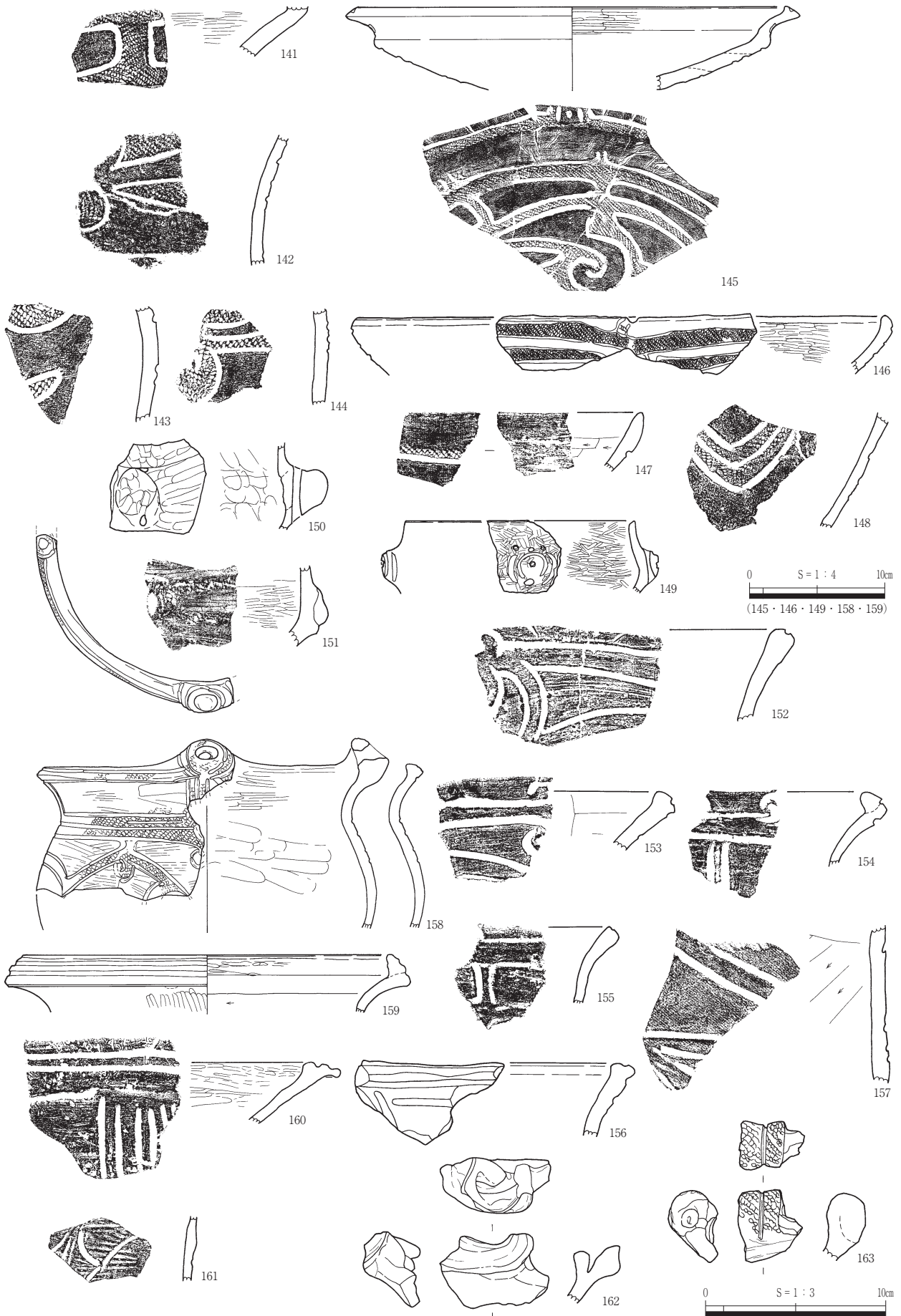
これら出土遺物のうち、1-Ⅴ層の出土土器の割合をみると、表7のとおりとなる。帰属時期の不明な粗製土器については、大半は突帯文土器様式期のものと考えられ、最も割合が高くなるものと考えられる。この時期では明確な遺構はわずかし確認されなかったが、集落本体としては調査範囲の周辺に展開しているものと推定される。次いで、後期初頭の五明田式併行（中津・福田 K II 式様式第3様式古段階）の割合が高く、1区で検出された竪穴建物跡などの遺構検出の割合からも、この時期は、比較的長期間に亘って集落が造営されたものと考えられる。

表7 1-Ⅴ層出土土器時期別割合

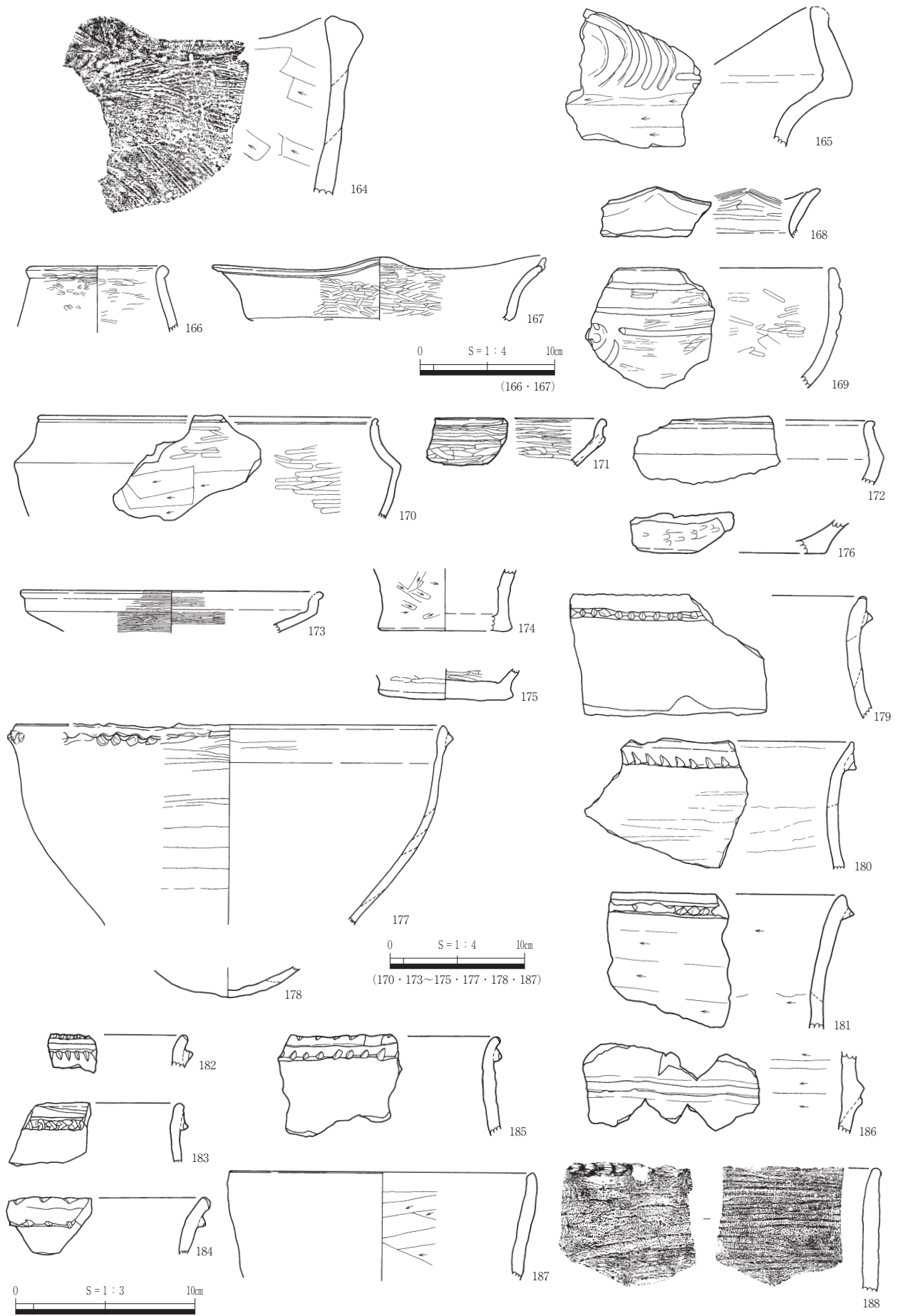
| 時期 | 点数 | 割合 |
|----------------|-------|---------|
| 早期前半（大川・神宮寺式） | 1 | 0.02% |
| 早期後葉（黄島式） | 14 | 0.27% |
| 早期末葉（高山寺式） | 1 | 0.02% |
| 早期末葉（菱根式） | 15 | 0.29% |
| 前期（西川津式か） | 5 | 0.10% |
| 中期後葉（里木Ⅱ・Ⅲ式か） | 4 | 0.08% |
| 中期末葉（北白川 C 式） | 23 | 0.45% |
| 後期初頭（五明田式） | 157 | 3.05% |
| 後期初頭（島式） | 37 | 0.72% |
| 後期前葉（布勢式） | 14 | 0.27% |
| 後期前葉（縁帯文） | 3 | 0.06% |
| 晩期前葉（磨研土器様式期） | 19 | 0.37% |
| 晩期後葉（突帯文土器様式期） | 40 | 0.78% |
| その他・不明 | 1,107 | 21.50% |
| 粗製土器 | 3,709 | 72.03% |
| 総数 | 5,149 | 100.00% |



第53図 1-V層出土遺物(1)



第54図 1-V層出土遺物(2)



第55図 1-V層出土遺物(3)



第56図 1-V層出土遺物(4)

第4節 弥生時代の調査成果

1 概要 (第57図)

この時期の遺構は、弥生時代の遺構がわずかに検出された。1区では土坑1基(SK14)、流路1基(SD 1)を検出した。いずれも、弥生時代後期後葉の土器が出土しており、この時期に埋没したものと考えられる。

この時代の出土遺物としては、主にSD 1埋土中から、前期から後期にかけての土器が出土した他、磨製石斧などの石器が出土した。検出することはできなかったが、調査区南側などの周辺には、当該期の集落が、長期に亘って断続的に営まれていたものと推察される。

2 土坑

SK14 (第58図、PL. 28)

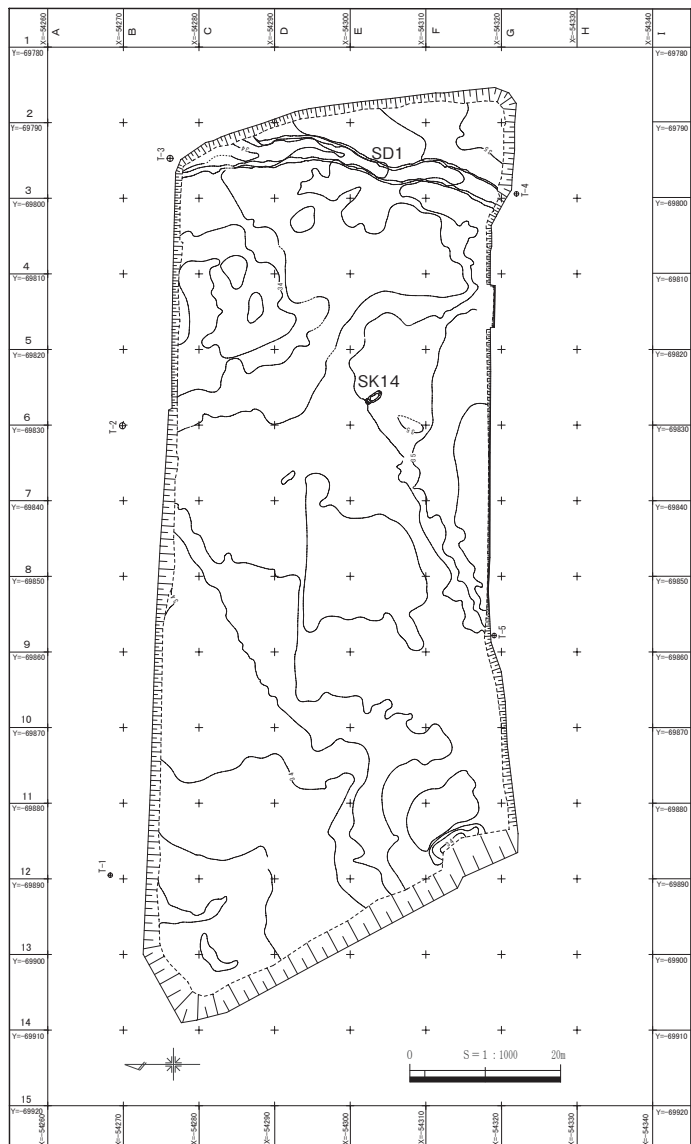
1区南東側のE 5グリッドにあり、標高34.8 m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1 - VI層上面で検出した。北側は古墳時代の溝SD 2によって部分的に掘り込まれている。

平面形は長楕円形を呈し、長軸2.48 m、短軸0.95 mを測る。断面は、長軸方向は両端側を二段に掘り込み、短軸方向は逆台形状を呈す。深さ最大0.34 mを測る。底面は長軸1.37m、短軸0.5 ~ 0.6 mのやや不整な楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。

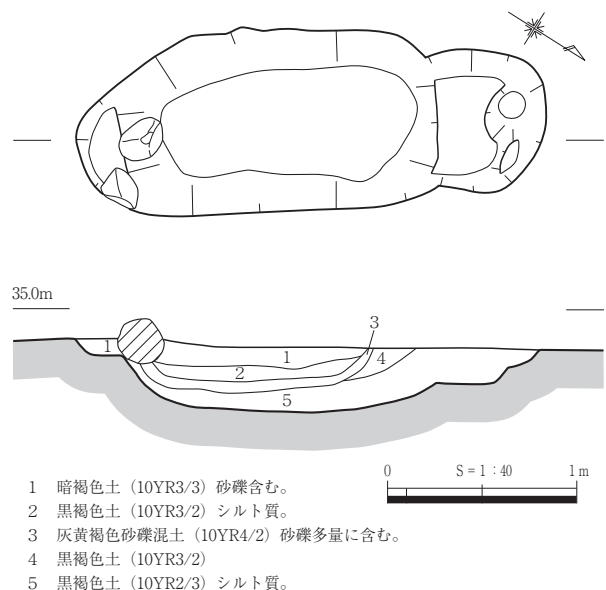
埋土は、5層に分層できた。土層観察では、最下層のシルト質の黒褐色土(5層)を掘り込み、後に砂礫を含む1 ~ 4層が堆積した状況が観察できた。南側では、自然礫が床面から浮いた状態で出土している。

遺物は、埋土中から弥生土器片が出土したが、図化できなかった。

出土遺物から、清水編年V - 3様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。



第57図 1区弥生時代遺構配置図



- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 砂礫含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) シルト質。
- 3 灰黄褐色砂礫混土 (10YR4/2) 砂礫多量に含む。
- 4 黒褐色土 (10YR3/2)
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) シルト質。

第58図 SK14